

「平成の乱」の 行方

森 一久

(財)温水養魚開発協会常務

巻頭随想



ノバ ブル崩壊の直後、哲学者の山折哲雄氏は「今回の大改革は、500年前の応仁の乱にはじまる大地殻変動に匹敵する」と述べた。この言葉に触発され、私なりに考えを整理してみた。

500年引きずってきた旧体制

1467年応仁の乱勃発で戦国時代へ突入、100年に及ぶ内戦と飢餓の阿鼻叫喚を経て出来上がった日本のトータルシステムは、明治維新でも、敗戦後も、基本的に全く変わらず、ずっと引き継がれてきた。いま日本が直面する難局が並のものでない事は、各界とも強く認識し、大小の対策が提案・実施されている。その殆どすべては、外国（特にアメリカ）からの受け売りであり、また、ある程度成果をあげたかのようにみえるものもある。しかし、この大改革劇は、その演出や俳優や道具建が少々変わっても、一貫して先の「トータルシステム」が重苦しい「基底音」のように付きまとっている。そのためか、なす事すべて先送り、中途半端で国民の苛立ちも高まっている。

蓮如が支えた日本の心

応仁の乱に始まった悲惨な大地殻変動からの再建の過程においては、日本人の思想の変革が決定的な要素となった。望みなく荒れ果てようとしていた大衆の心に、再び火を灯したのは、本願寺再興の僧「蓮如（れんにょ）」だったといわれる。蓮如は浄土真宗の浄化に取組み、大衆と同じ目線で教義をわかりやすく語るなど、阿弥陀如来への信仰がもたらしうる、心の安息と思考の自由とを説いて回った。人々は、世の無常を悟るとともに、柔軟な思想を持って生きるという勇氣に触れ得た

のであろう。そして爾来、江戸時代には浄土真宗は国民の4割が信徒といわれる位、精神や思想に大きな影響を与え続けた。

このようにして、500年前日本を襲った大動乱期において、日本人が平静心を取戻し、次の秩序を模索し始めることが出来た。そうでなければ、日本人の心に修復し難い亀裂を残したことであろう。朝鮮戦争で同様の「地獄」をみたお隣りの民族の、50年余にわたる分断と苦難をみるにつけ、その感を深くする。

「無常」を見失ったか、日本人

そもそも日本の直面する大改革の困って来る所以が、在来の日本システムのあらゆる面での「制度疲労」であることはいうまでもないが、同時に精神・思想の面における風化や墮落が大きな要因となっているのではなかろうか。もともとこの世の中の総てのものは、うつろい変わって行くもの、つまり「無常」である事は、仏教の洗礼を受けてきた日本人には常識といえる事だったはずなのに……。最近の状況をみていると、デジションや行動の早い外国人の方が、「無常」を体得しているのではないか、という気がしてくる。

「土地の価格は永久に上がる」という神話に皆が酔いしれ、その挙げ句の倒産劇がつづき、「会社は永遠なり」の言葉を遺して自ら逝った社長さん。また国民が財布の紐を緩めてくれないのは「老後の不安」だ、と言う。果たして我々は、「無常」を識るが故にこそ、（衣食足りた時には）「永遠なもの」に憧れてしまうほど、ヤワな心の持主の国民なのであろうか。